

【論文】

織豊系城郭としての江戸城

中井 均*

目次

はじめに

1. 織豊系城郭とは
 2. 徳川家康の江戸築城
- おわりに

キーワード 織豊系城郭 石垣 瓦 礎石建物 土造りの城 3代の天守

はじめに

かつて皇居は江戸城と呼ばれ、徳川将軍家の居城であった。その具体的な姿は幕末から明治初年に撮影された写真によってうかがい知ることができる。また、現在の皇居の姿、石垣や水濠、櫓、門などによっても知ることができる。しかしこうした姿は実は徳川家康によって築かれた江戸城を伝えるものではない。その大半は慶長8年(1603)に将軍宣下を受けてから慶長19年に始まる大坂の陣まで毎年のようにおこなわれた手伝普請による本丸、二の丸、三の丸の石垣普請、二代将軍秀忠が元和4年(1618)より元和6年にかけて実施した西の丸南堀普請、三代将軍家光による寛永6年(1629)から寛永13年にかけての内郭の石垣・櫓形普請と外郭普請によって完成されたものである。

では、天正18年(1590)に徳川家康によって築かれた江戸城とはどのような構造であったのだろうか。残された文書はほとんどなく、中心地は明治以降皇居となり、立ち入ることもできない。部分的には発掘調査も実施されているが、その情報量はきわめて少ない。拙稿の目的は天正～慶長期における江戸城の構造を分析することにあるが、今回は限られた史・資料では到底考察をすることは不可能であり、ここでは他の同時期の城郭との比較研究によって検討を加えるものである。

さて、比較研究の具体的方法としては、天正～慶長期に西国で確立され、以後の列島の築城技術を席捲した「織豊系城郭」の視点から家康の江戸城を分析するものである。

*織豊期城郭研究会
米原市教育委員会まなび推進課長

1. 織豊系城郭とは

(1) 安土城の構造

それでは本論に入る前に、照射する側である織豊系城郭について簡単にその特質について述べておきたい。

天正4年(1576)織田信長によって築かれた安土城は、それまでの戦国期の城郭とは一線を画す構造として登場した。その特徴は以下の3点に要約することが可能である。

1点目は高石垣の導入。戦国時代後半になると城郭の普請に石垣、あるいは石積みが導入されることとなる。その最古例に位置するのが、近江守護佐々木六角氏の居城、観音寺城である。金剛輪寺文書「下倉米銭下用帳」によると、天文5年(1536)の記録に「御屋形様いしがき」、「御屋形様御石垣打」、「上之御石垣」などとあり、これが現存する観音寺城の石垣とみてまちがいない。さらに六角氏領国には佐生城、小堤城山城、星ヶ城、三雲城などにも石垣が導入されており、六角氏の特徴として捉えることができる。こうしたうねりは備前、西播磨、北近江、北部九州などでも確認されており、戦国城郭のひとつの到達点として捉えることができる。織豊以前の石垣、石積みを16世紀半ばのうねりとして位置付けられる。この戦国城郭の石垣と一線を画する石垣が安土城の石垣である。高さは5mを超える高石垣となり、隅部は反りこそないものの稜線の通る算木積みが完成されている。

2点目は瓦葺き建物の導入である。高石垣を導入した先駆的事例である観音寺城では広範囲にわたって発掘調査が実施されたがわずかに1点の瓦片が出土しただけであり、城郭建造物に葺かれたものではなく、城内に存在したと考えられる仏堂などの宗教施設に用いられたものと考えられる。安土城では唐人一観の指導により奈良衆によって焼かれた瓦が葺かれており、金箔瓦が史上初めて軒先を飾った。以後日本の城郭は普請重視から作事重視へと大きく変化するわけである。

3点目は礎石建物の導入である。戦国城郭の大半は小規模な掘立柱建物が中心であったが、高石垣の構築によって石垣上にお厚い壁をもつ重層建物の建築が可能となった。さらには瓦葺きにより恒久的かつ耐火性に強い建物が城郭に出現する。その礎石建物の最大の施設が天主という象徴的な重層建物であった。

この3つの要素がリンクすることによってそれまでの戦国城郭と一線を画する織豊系城郭が誕生したのである。織豊系城郭こそが後の近世城郭へと発展するわけで、徳川家康の築いた江戸城もこうした近世城郭のイメージが強いのではないだろうか。

図1は安土城の主要部平面図で、中心に位置するのが五重七階の天主の建てられた天主台である。図左端のAが主要部の虎口となる黒金門で、外枳形構造となっている。こうした虎口構造は現存する江戸城にも多用されており、敵の直進を妨げる構造となる。また、安土城では本丸に天主とともに御殿空間が存在する。図2がこの本丸御殿平面図である。近年、安土城本丸

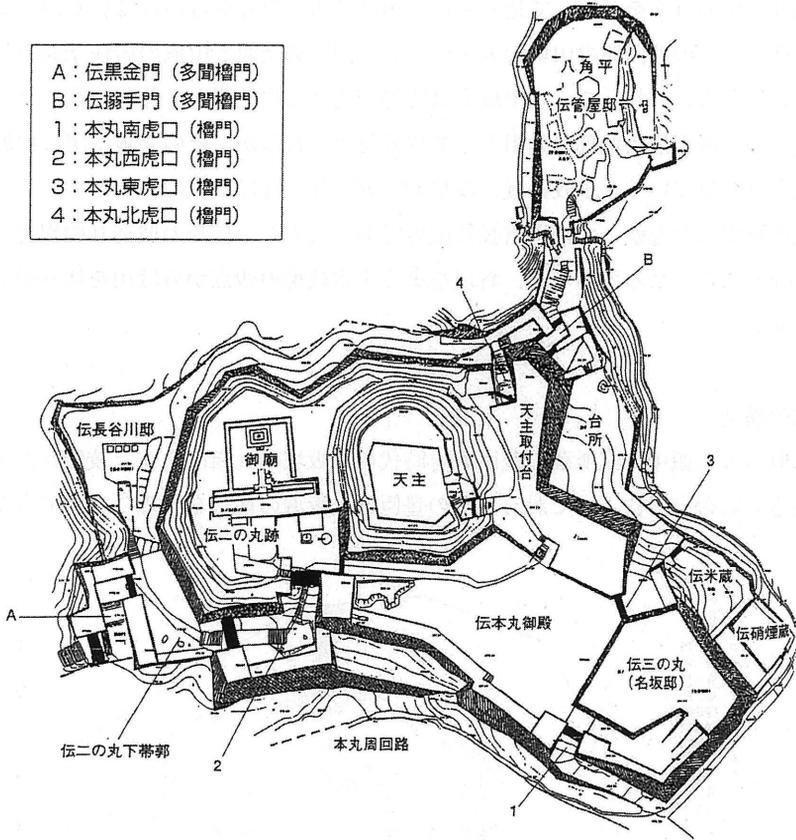


図1 安土山信長の居住城平面図 (木戸雅寿『天下布武の城 安土城』より)

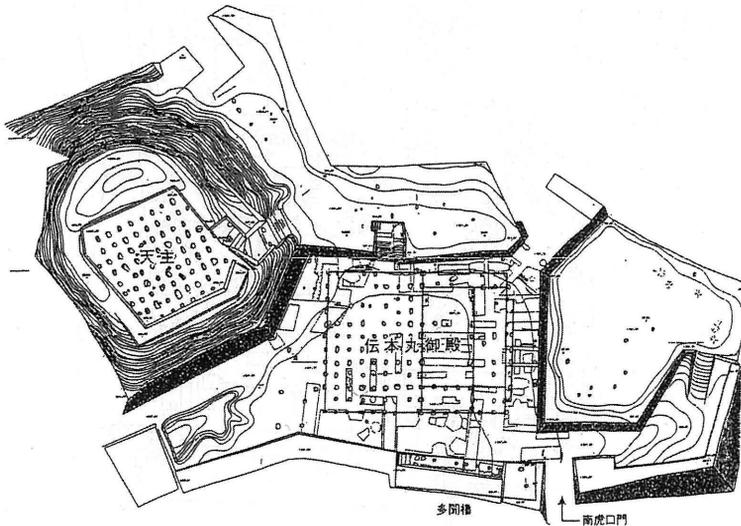


図2 安土城本丸御殿跡・天主跡平面図 (水戸雅寿『天下布武の城 安土城』より)

御殿は正親町天皇の行幸を意図して造営された施設であったとも言われているが、ここで注目したいのはそれまでの戦国期の山城の大半が、山上の防御空間と山麓の居住空間が分離する二元的構造であったものに対して、安土城では防御空間と居住空間が一体化したことである。

このように安土城が近世城郭の始祖として位置付けられるが、その立地は実は山城であり、信長の築城過程を見ていくと小牧山城、岐阜城、安土城と常に山城に依存していたことが知られる。山城を捨てられなかったのが信長の限界であったのか、信長の城造りの理念であったのかは議論の分かれるところであるが、石垣を築く土木技術の観点からは山を切り崩すほうが圧倒的に築き易い。

(2) 大坂城の構造

図3は幕府の大江頭中井家所蔵の豊臣秀吉時代の大坂城本丸指図を宮上茂隆氏がトレースしたものである。この史料によっておおよその豊臣期大坂城の構造を知ることができる。ここで

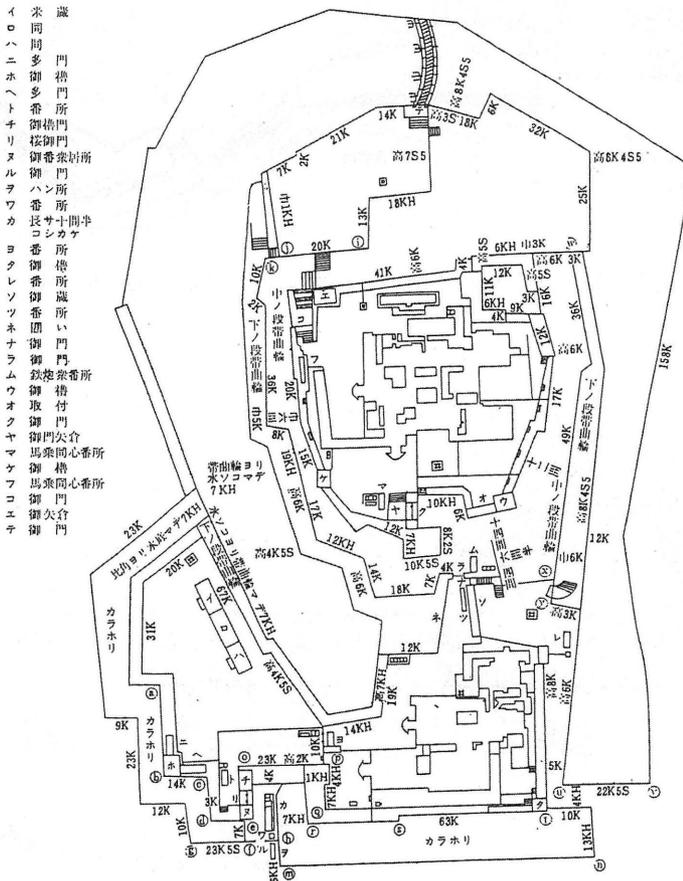


図3 中井家所蔵豊臣氏大坂城本丸指図トレース図(宮上茂隆「豊臣秀吉築造大坂城の復元的考察」より)

は安土城と同様に本丸空間のなかに御殿を造営しており、防御空間と居住空間が一体化していることがわかる。さらに重要な点は秀吉は山を下りたことである。大坂城の築かれた上町台地は北側こそ河岸段丘となるが、南方天王寺側は高低差がほとんどない。つまり平地にこれだけの堀と石垣に囲まれた城が天正11年（1583）に築かれるようになる。安土築城からわずか7年後には平野部分に巨大な堀を掘り、遠方から石材を切り出し、持ち運んで築くことが可能になったわけである。実は安土城の石垣の石材は基本的には安土山で産出される湖東流紋岩である。つまり安土山を削って曲輪を造成し、その段階で産出した石材を利用して石垣を築いたわけである。ところが大坂城の場合、平地での築城であり石材の確保は現地では不可能である。したがって生駒山や六甲山方面から搬出せざるを得ないこととなり、大量の石材を遠方から運んで石垣を組むこととなる。大坂築城は安土城とは比較にならない莫大な労働力、土木技術が必要となったわけである。近世城郭の始祖は安土城であったことに間違いはないが、近世城郭の完成という点においては豊臣大坂城こそ、以後の築城を決定付けたとして評価すべきであろう。

2. 徳川家康の江戸築城

(1) 天正18年の江戸築城

天正18年（1590）、関東を平定した豊臣秀吉は後北条氏領である相模、伊豆、武蔵、上総、下総、上野の6ヶ国を徳川家康に与えた。家康が関東支配の拠点として居城を構えたものが江戸城である。この江戸城は家康以前にも城郭が構えられていた場所であった。11世紀に秩父氏の一族江戸氏が居館を構えたことが始まりとされるが、実際に城郭として機能するのは室町時代に江戸氏に替わって入城した扇谷上杉家の家臣太田資長の頃からである。資長の江戸築城について『鎌倉大日記』では長禄元年（1457）の築城と記している。資長は道灌と号し、扇谷上杉家の勢力拡大に大きな働きをする。その中心として江戸城が築かれたわけである。当時の江戸は日比谷の入江に面した海岸段丘の先端に位置していたと考えられる。竹橋にある国立近代美術館建設工事に伴う発掘調査によって15世紀代の青磁皿、白磁皿などが出土しており、当時の江戸城が現在の本丸、北の丸あたりに位置していたことがうかがえる。

大永4年（1524）、江戸城は後北条氏の城となり、同氏の武蔵における重要な拠点として機能する。国立近代美術館建設に伴う発掘調査では15世紀の遺物とともに青花皿、白磁皿、瀬戸美濃産陶器や刀子、鉄鏃、鉄砲玉など16世紀後半の遺物も出土しており、後北条氏時代の江戸城の様子をうかがうことができる。

こうした江戸氏、太田氏、後北条氏時代の江戸城については現在の本丸、北の丸周辺に位置していたことはまちがいないが、その具体的姿を伝える史・資料はまったく残されていない。ここでは海岸段丘を利用したという地形的条件のみしか提示できないが、その最大の特徴は土造りの城であったということである。石垣などは全く用いられていなかったし、もちろん天守

などという高層建築も存在しないし、さらには瓦葺きの建物など1棟もなかったのである。こうした江戸城に家康は入城したわけである。図4は慶長7年(1602)以前であろうと考えられている「別本慶長江戸図絵図」であるが、ほとんど城の構造というものはわからない。ただ周囲に堀を巡らせているだけである。『石川正西聞見集』には、

「一、(前略)其比は江戸は遠山居城にていかにも龜相、町屋などもかやふきの家百計もあるかなしの体、城もかたち計にて城のやうにも無之あさましきを、(中略)

一、関東御入国之比は江戸御城は御本丸之外二ツ御丸御座候つる、此内一ツは福松様御座候つる、又一ツにハ御万様御座候つる、是を一ツに被成今の御本丸に成申候、山の手は皆野原にて御座候つる、西の御丸も野にて御座候つるを新儀に被成成立候、山の手の手惣堀も其以後に被仰付御ほらせ被成候、西の御丸も堀そこより石垣に被成可然と皆々被御申上候へ共、將軍様御合点不被成、中ほとより石垣に被仰付候、かように略被成候儀も諸人苦身御いたはり与其比下々取沙汰申候つる、江戸中の御普請の事も本田佐渡殿みな御さしつ次第にて候、(後略)」

と記されているように、目の前にある後北条氏の支城としての江戸城はあまりにも貧弱であった。ただその段階の江戸城は本丸とそのほかの2つの曲輪から構成されていたようである。家康入城にあたってその2つの曲輪をひとつにして現在の本丸とただけであった。『家忠日記』によると、文禄元年(1592)3月29日条に「ご隠居の御城の堀を担当」と記されており、この堀は西の丸の堀であったと考えられる。斎藤慎一氏によると天正18年当時の江戸城は東側に日比谷の入り江があり、西側が正面であったという。したがって家忠が担当した堀とは西側の台地を画する堀、つまり現在の道灌堀であった可能性が高い。図6、図7は江戸城周辺の等高線図と断面図であり、江戸城が入り江に突出した海岸段丘の先端部を利用していたことがわかる。この選地は関東地方の戦国期の城館、特に千葉県に濃密に分布する段丘先端を利用した城郭に似る。それらの城館は段丘先端に堀切を幾重にも巡らせ、段丘面を切断し、曲輪を形成する構造となる。家康入城段階の江戸城も同様の構造で、土造りの城であった。

ところで6ヶ国240万石の大大名が転封先で新たな居城を築城することは当然の行為であり、おそらく転封最初に手がける工事のはずである。ところが家康は江戸城の改修をほとんどおこなっていない。家康転封の天正18年という年は大変重要な年である。信長の安土築城より14年後、秀吉による大坂築城より7年後にあたり、織豊系城郭の構造が豊臣大名のなかに浸透し、数多くの織豊系城郭が築かれる時代である。例えば家康とともに豊臣大名の筆頭となる毛利輝元は天正17年(1589)に広島城の築城を開始する。それまでの毛利氏の居城は吉田郡山城という山城であった。郡山城は単に軍事施設としての城だけではなく、毛利氏にとっては父祖伝来の聖地でもあった。したがって戦国時代に居城の移動はまず考えられない。それが織豊政権になると転封という大名の移動が始まる。そのなかで織豊系城郭が各地に築かれることとなったのである。輝元は当初郡山城の修築を意図していたのであるが、秀吉との謁見のため上洛して

織豊系城郭としての江戸城

此図弘化二年九月山下右衛門下延部市村等にて之所取せしを指すべくつしおくもの也
 因中二小田原トあるハ外核田御門の事ならん、土橋とあるハ半蔵御門の事ならん、上州道トアルハ田安御門の事ならん、芝橋トあるハ神田橋の事ならん、淺草口トあるハ常盤橋の事ならん、吉祥門トあるハ内核田御門の事ならん、堂り坂トあるハ今九段坂の辺をらん、此辺辺五ノタアル所ハ今大名小路ト辺ならん、肴ヤ・願屋五ノタアルハ今日比谷ノ辺ならん、
 此図八小田原の医師山谷といふ者、本書を所持せしを右右衛門招父兵衛うつしおきしナリ、

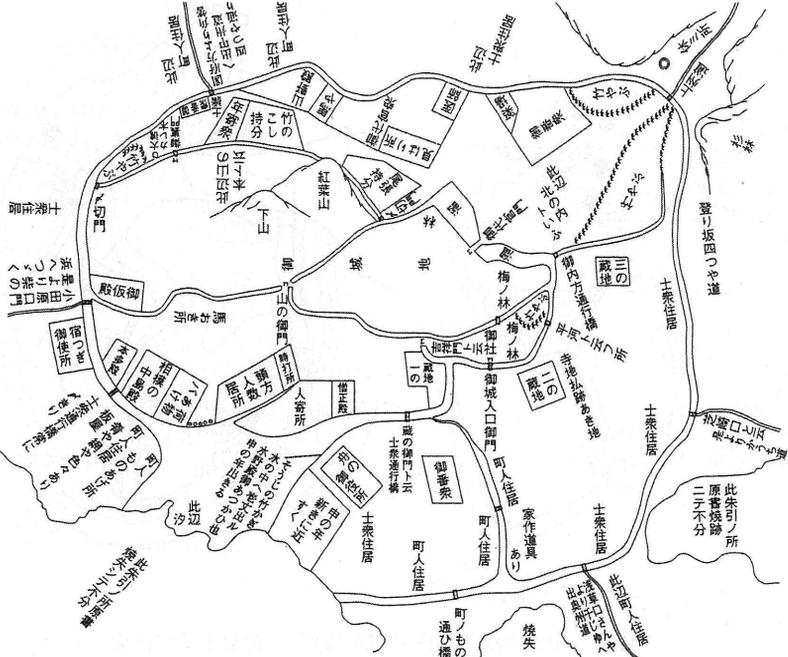


図4 別本慶長江戸図トレース図（『新編千代田区史』より）



図5 慶長江戸絵図トレース図（『新編千代田区史』より）

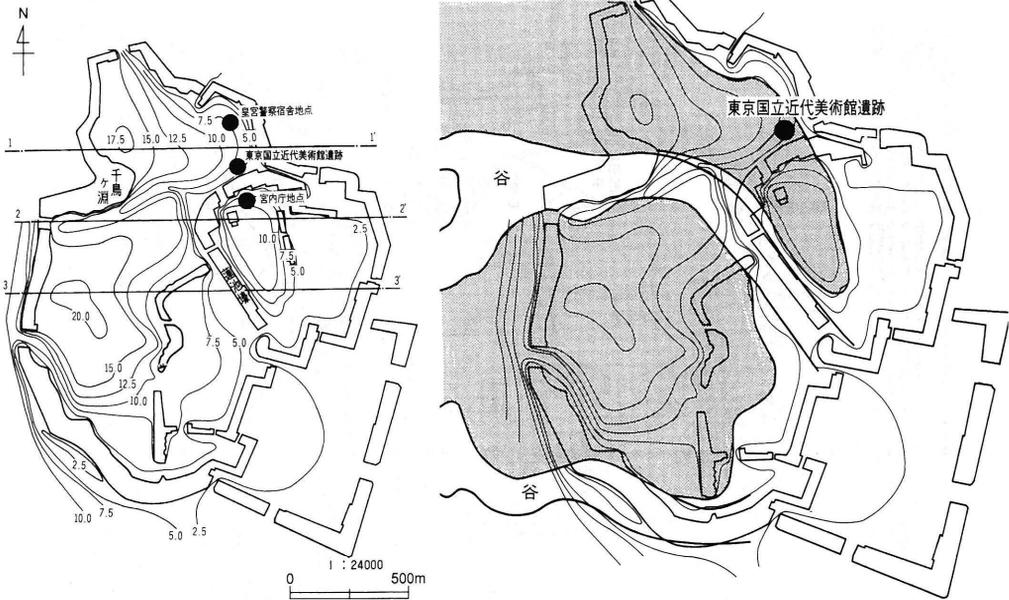


図6 中世の江戸城内の地形復原（『新編千代田区史』より）

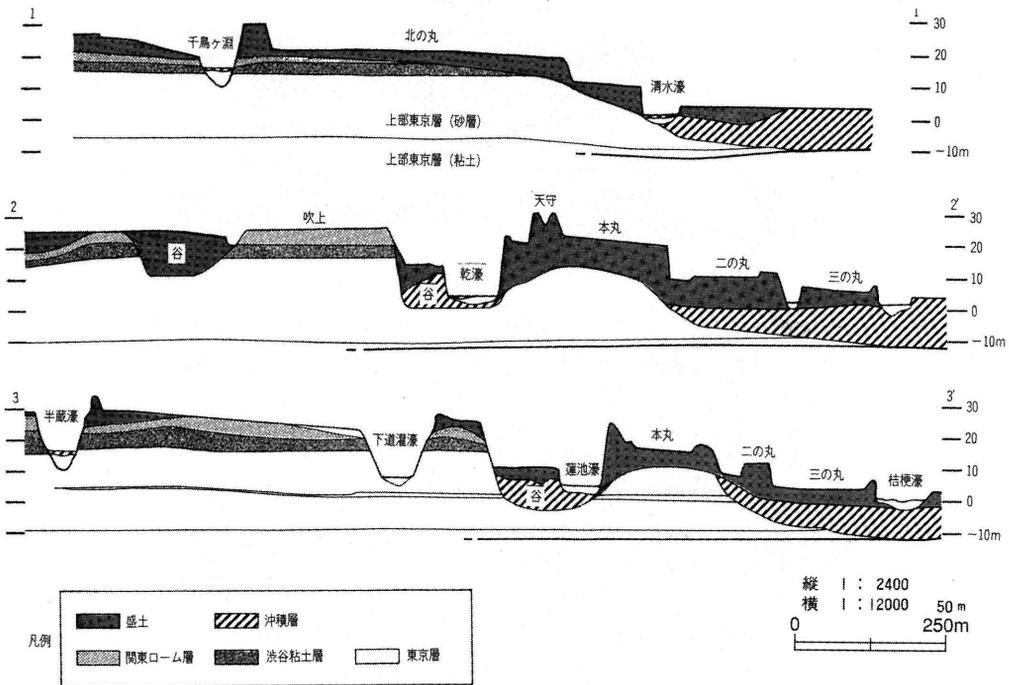


図7 江戸城内での地層断面想定図（『新編千代田区史』より）

聚楽第を目の当たりにして広島築城を開始するのである。その構造は聚楽第の絵図に類似する。おそらく輝元自らが父祖伝来の聖地郡山城を捨てて広島築城をおこなったのではなく、秀吉による場所の選定が考えられよう。同様の事例が四国にも存在する。天正13年（1585）、秀吉は四国攻めをおこない、長宗我部元親には土佐一国が安堵される。元親の豊臣大名化はいち早くおこなわれ、それまでの居城であった岡豊城を捨て、大高坂山（高知）城の築城を開始する。岡豊城は長宗我部氏にとってはやはり聖地であり、元親自らが居城を移したとは考え難い。おそらく大高坂山築城は秀吉の命令によるものと推察される。さらに天正19年（1591）には浦戸築城が開始される。この浦戸築城は秀吉の朝鮮出兵の水軍根拠地として築かれたことはまちがいない、ここにも秀吉の関与があったと考えてよいだろう。

つまり豊臣大名が天正13～18年前後に居城を移すのは秀吉の政治的施策であったようだ。天正18年7月5日、後北条氏は降伏し、同月18、19日頃に秀吉と家康は江戸城に入城し、秀吉は家康に江戸城普請を命じている。どうやら関東転封における家康の居城の選定も毛利氏や長宗我部氏同様に秀吉によって決定されたものと考えられる。当然、天正18年に江戸に入城した家康も江戸城に高石垣を築き、天守を造営するはずであるが、それをしない。他の豊臣大名とは違った城造りをおこなっている。石川正西の記録からはわずかに曲輪2つを1つにしたに過ぎない。さらにその後、西の丸も堀底より石垣にしようとしたのだけれども家康の意見によって中程より上部のみを石垣にしたに止まっている。

どうも天正18年の家康による江戸築城は豊臣大名としてのものではなく、実は大変在地的な城だったのではないかと考えられる。三河以来、徳川氏が築いてきた土造りの城だったのである。つまり海岸段丘上に構えられた後北条氏時代の江戸城とさほど変化がなかったのである。この徳川家康段階の江戸城の実態は今後城郭史という観点からだけではなく、豊臣政権下における大名徳川家康の政治的位置からも注目される現象ではないだろうか。こうした状況は家康の征夷大將軍の叙任による江戸城修築との比較により、より鮮明に浮き上がってくる。

(2) 慶長8年の江戸築城

慶長8年（1603）、將軍宣下の後、家康は江戸城の修築にとりかかる。それまでの三河以来の大名の居城としてではなく、將軍としての城造りをおこなうわけである。それは土造りの城から石造りの城へ、言い換えれば戦国城郭を織豊城郭へと大改修したのである。さらに慶長12年（1607）には織豊城郭の象徴でもある天守が江戸城に造営された（図5）。天正18年の入城以来、実に17年後の天守の造営であった。こうした石垣の導入や天守の造営がおこなわれたという事実は、天正18年の江戸城は意識的に織豊城郭に改修しなかったことを示唆しているようである。江戸城天守については二代將軍秀忠が家康の天守を取り壊し、新たに天守を造営するという、実に不思議な現象が認められる。さらに三代將軍家光は寛永年間に父秀忠の天守を大改修して、家光の天守を築くことになる。300諸侯の頂点として將軍の城は日本に一つしかな

い城であり、諸大名の城では天守が象徴であったが、江戸城では初期の幕府の段階、家康、秀忠、家光の将軍の代替わりごとに天守を造営、改修をおこなっていたわけである。天守こそが近世城郭の象徴であることを端的に物語る現象として注目される。将軍宣下のイベントとして天守が造営、改修されたわけである。

この慶長期の江戸城修築は全国の諸大名を助役として動員する天下普請であった。単に将軍の城として改修されたのではなく、その普請に諸大名を動員するという公儀権力を行使した点は重要である。

天正18年の土造りの江戸城から、慶長8年以降の石造りの将軍の居城へと変わっていく。さらに寛永年間には、それこそ生まれながらにして将軍であった家光の城として改修を受け、現在我々が抱くイメージとしての江戸城に変わっていくという3段階の城の姿が認められる。

(3) 箕輪城から江戸城を考える

ところで天正～慶長年間の江戸城を考えるにあたって重要な城郭である箕輪城の発掘調査について触れておきたい。現在箕輪城は発掘調査が継続的に実施されており、関東地方における近世初頭の築城が明らかとなっている。箕輪城は山内上杉家の重臣長野氏の居城であったが、天正18年（1590）、家康の関東転封にともない井伊直政が箕輪領12万石を賜わり、その居城として改修された。この転封は秀吉主導によるものであり、秀吉は家康家臣団への知行割にも深く関わっていた。直政の箕輪、本多忠勝の万喜への転封を家康に提案していたのである。箕輪城は慶長3年（1598）に直政が和田（高崎）へ転封となりわずか8年で廃城となった。

図8は箕輪城の測量図で、段丘の先端を利用して広大な横堀を巡らせて曲輪を囲郭していた構造であることがわかる。さらに発掘調査によって随所で石垣が築かれていたことが確認されている。石材には矢穴は認められず切り出されたものではなく、自然の石が用いられており、いわゆる野面積みであり、織豊系の石垣としては稚拙さを拭い去ることはできない。図9は三の丸の石垣で、巨石を用いてはいるものの築石部の法面は垂直に近く、戦国的な角度を示している。また、本丸や二ノ丸では地表面で確認できる石垣は天端近くにのみ認められることより、切岸中腹より上部にのみ石垣が用いられていたようである。また、郭馬出では見事な門の礎石が検出されているが、瓦片は出土しておらず、城内の施設に瓦葺き建物は存在しなかったようである。ここでも完全な織豊系城郭へとは改修されず、土造りの城と石造りの城が混在する城郭が造営されたのである。こうした箕輪城のあり方に天正期の江戸城の姿をうかがうことができるのではないだろうか。

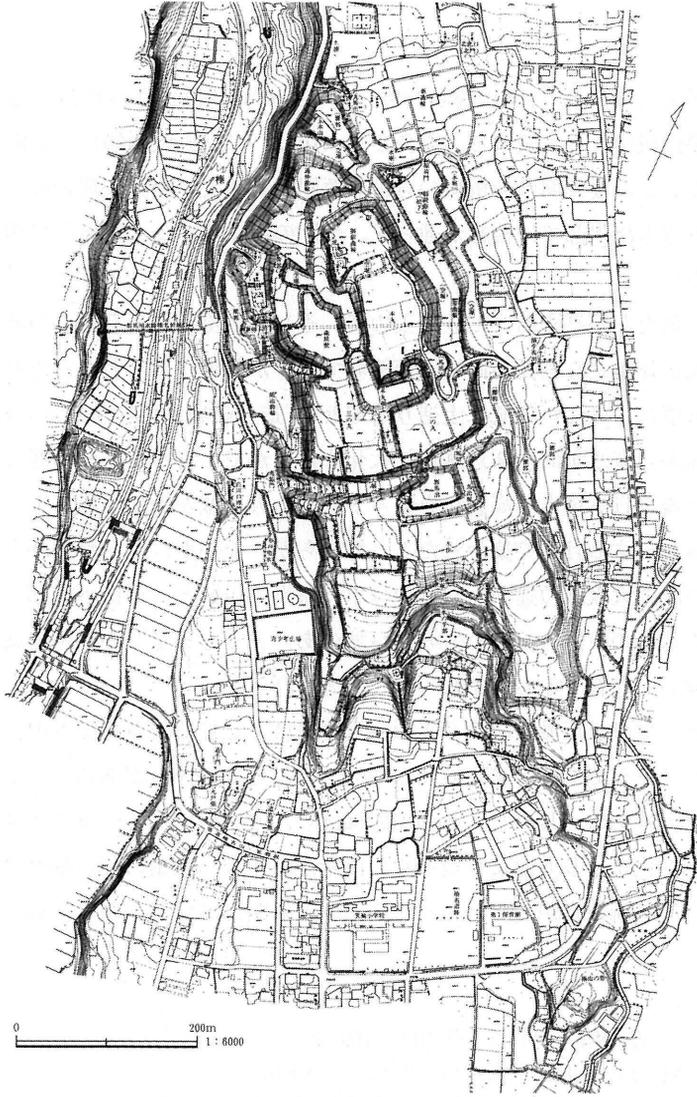


図8 箕輪城跡測量図（『史跡箕輪城跡Ⅰ』より）

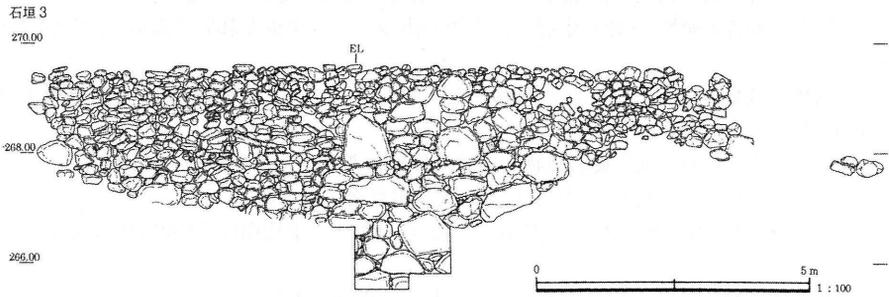


図9 箕輪城跡三の丸（『史跡箕輪城跡Ⅰ』より）

おわりに

慶長5年(1600)、関ヶ原合戦の論功行賞により井伊直政は近江へ転封となり、石田三成の居城である佐和山城へ一旦入城する。慶長8年(1603)には直政の嫡男、直継によって彦根築城が開始される。この慶長期の彦根城の石垣も西国大名の築いた慶長期の城と比較すると、高さも低く、積み方も出隅部では稜線が通らず、西国の城に比べると石造り自体が稚拙であることは否定できない。

東国の戦国大名たちが築きあげてきた土の城、そして豊臣大名の石造りの城という2つの流れがちょうど天正18年から慶長年間の江戸築城でぶつかり合うこととなったわけである。まさに天正18年の家康による江戸築城は土造りの城と、石造りの城が混在するものだったのである。一方、元和年間から寛永年間に江戸城が拡大化するなかで、まったく同時期に徳川幕府によって築かれた大坂城は日本最大の高石垣を造っている。大坂城が徳川幕府による西国への抑えであり、豊臣色を払拭する目的で築かれたことはまちがいないが、同じ幕府権力が造ったにもかかわらず、江戸城と大坂城の違いというのは単に將軍の居城と、西国への抑えというだけではなく、やはり土造りの東国の城としての江戸城のあり方と、石造りの西国の城としての大坂城という明確な違いが存在するのではないかと考えられる。

織豊系城郭としての江戸城は慶長8年の將軍の居城として改修されたものであり、それが現在の江戸城のイメージである。家康の江戸城もこうしたイメージがあるが、実は三河以来の土造りの城だったのである。しかし、その実態はほとんど不明である。將軍の城としての江戸城は構造、建築、文化など多方面より数多くの研究があるが、家康の江戸築城については皆無である。この江戸城の新視点が契機となり、その実態解明について今後に期待したい。

〈参考文献〉

- 『新編千代田区史 通史編』(東京都千代田区、1998年)
- 『新編千代田区史 通史資料編』(東京都千代田区、1998年)
- 追川吉生『江戸のなりたち[1] 江戸城・大名屋敷』(新泉社、2007年)
- 木戸雅寿『天下布武の城・安土城』(新泉社、2004年)
- 宮上茂隆「豊臣秀吉築造大坂城の復原的研究」(『建築史研究』37、建築史研究会、1967年)
- 中井 均「織豊系城郭の画期 - 礎石建物・瓦・石垣の出現 -」(『中世城郭研究論集』新人物往来社、1990年)
- 中井 均「織豊系城郭の特質について - 石垣・瓦・礎石建物 -」(『織豊城郭』創刊号、織豊期城郭研究会、1994年)
- 中井 均「城郭にみる石垣・瓦・礎石建物」(『戦国時代の考古学』高志書院、2003年)
- 齋藤慎一「江戸の中世から近世」(『UP』411、東京大学出版会、2007年)
- 『平成17年度特別展 江戸城の堀と石垣 - 発掘された江戸城 -』(千代田区立四番町歴史民俗資料館、2005年)
- 秋本太郎他『史跡箕輪城跡 I ~ V』(箕郷町教育委員会、2000~2005年)